

都市の魅力ー台北

博士後期課程 蕭 閔偉

台北市は、台湾を代表する大都会や美食の町として知られると同時に、特に官民協働といった形を取りつつ遊休施設の活用によって新たな価値を生み出そうとするさまざまな先進的なまちづくりの取り組みによって、新たな魅力を醸し出している。

たとえば行政主導のプロジェクトとして、台北市政府文化局の「老房子文化運動」という、市内に存在する歴史的建造物の保存と活用を目的に、民間企業の資金や経営力を活かしたりリノベーション事業があり、その一例として、歴史ある日本統治時代の穀物倉庫を改修し一階に有機食材直売所で二階にレストランを併設する八徳路の路地裏にある「一号糧倉」(写真 1、2) という拠点がある。上物も土地も国が所有し台北市文化局が仲介役として歴史的建造物の修繕と活用を経営力のある民間企業に依頼し事業を展開している。事業の理念としては、現代社会のスーパーに劣らぬ食材を提供し地域住民の食生活を支えながら、伝統的な街の市場としての地域の交流の場の機能を持った拠点である。

一方で、地域主導のプロジェクトとして、南機場コミュニティの地域団体が始めたフードバンク(写真 3) という事例が目覚ましい。南機場地域は高齢者、障害者や外国籍配偶者など社会的弱者世帯が集住する住宅団地であり、かねてより福祉サービスへのニーズが強く、それに対応しようと地域が立ち上がり、以前から放置されてきた国所有の郵便局施設の活用計画を発案し関連部署と協議し、さらには積極的に台北市政府の都市更新処の都市再生前進基地(URS: Urban Regeneration Station) 補助金や民間の財団から寄付金など財源を確保しフードバンクの整備を実現し、物資に関しては量販店、企業や個人から広く物資を集め、地域のニーズある社会的弱者世帯に必要な時に必要な分だけ行き届くように管理運営している。

さらに、遊休施設を文化の拠点として整備した「台北当代芸術館」(写真 4) は、日本統治時代の 1921 年に小学校として建てられ、終戦後台北市政府庁舎として活躍していたが、新庁舎への移転とともに遊休施設になりながらも、1996 年に市の文化財指定を受け、2001 年から「台北当代芸術館」への転用が始まり、2008 年までは市と民間企業家グループの共同出資により「当代芸術基金会」が運営母体として、台北市の芸術に関する国際交流、普及活動に大いに貢献してきた。現在では台北市文化基金会が既存の運営方針を継承しながらも官民両方の資源を上手に活用し重要な文化拠点として運営を続けている。

このように、台北市では活発な官民協働により文化財保全、弱者支援、芸術普及活動など多様な都市政策が繰り広げられており、縦割り行政の垣根を取っ払った弾力性や、民間との綿密な協力関係は台北市の都市としての魅力作りの秘訣と言えるでしょう。



写真 1、2：「一号糧倉」の外観、1階部分



写真 3：南機場フードバンク



写真 4：台北当代芸術館